

見ようによつては、ほんの少し萎れているような感のある愛らしい金色の花をそつと撫で、ルーガはおもむろに立ち上がった。そして、背後を振り返ると目を細めて遠方に声をかけた。

「いるのは分かっている。——出てこい！」

すると、水源地を守るように並んだ木々の間から姿を現したのは、西の大国トラロック王国が誇る、王立図書館員だけが着用することを許された青い外套を羽織った男が二人、観念した様子で姿を現した。

その顔に見覚えがあつたルーガは、懲りぬ輩に失笑した。

「あとをつけるのは構わないがな、そこを一步でも前に動けば、お前たちは黒竜族の聖域を侵したものとして、俺の一存で断罪する」

次に、こつも付け加える。

「お前ら、前にルシフェル力をひどい目に遭わせた奴らだつたよな。

——手加減できそうにないから、覚悟しろ」

不敵に笑いながら歩み寄り始めたルーガに、王立図書館員の二人は意を決したようにお互い頷き合い、懷から小さな銀色の笛を取り出して口に咥えた。そして、もう一つ、今度は小さな巾着袋を取り出し、その中身を首筋に塗りつけたのだ。これは、守護獣が嫌う植物を原料に作られた、獣除けの薬であつた。

手早く準備を整えた図書館員二人のうち一人が笛を吹いた。かすれた甲高い音が聖域に響くと、雑木林の間から、一頭の黒い獅子が低く唸り声を上げながら現れた。

図書館員の一人が緊張した声音で離れた場所にいるルーガに大声で言った。

「黒竜族長よ。以前にも言ったが、その少女は、己で制御できない恐るべき力を持った『白い悪魔』だ。現に、我らが連れていたもう一頭の守護獣も倒されてしまった」

「そうだ。早くその被検体をこちらへ引き渡していただきたい！」

ルーガは勝手な言い分を押しつけてくる図書館員二人に激しい憤りを隠せなかつた。

握りしめた拳が怒りで小刻みに震え、冴えた青色の瞳に雷光が閃いた。

「自分で制御できない？ 守護獣が倒された？ —— ふざけたことを言うな！」

ルーガは、生まれて初めてとも言える怒声を発すると、あとは止めどなく憤怒とも私怨ともつかぬ言葉があふれ出た。

「お前たちトラロックの図書館員が、幾度となく双竜山に不法侵入しても、穏便に済ませてやっていれば図に乗りやがって……。だが今回ばかりは容赦できない。なぜなら、お前たちが連れてきた守護獣に、俺の甥が殺されかけたからだ。そして、ルシ力を苦しめ続けるなら、俺は俺の命をかけてお前たち王立図書館員と戦ってやる——黒竜族長としてではなく、ルーガ・レクスとしてな！」

刃物で一刀両断するかのような気迫に気圧され、図書館員二人は後退りしたが、黒い獅子は逆に闘争心を煽られ、ルーガに敵意をむき出しにしてきた。

野生の闘志漲る黒い獣に、金色の竜は好戦的な構えを見せる。

「お前も犠牲者だな……。だが、同情はしないぞ。かかってこい！」
ルーガの喝で、両者の体は一斉に前方へ跳躍したのだった。

第三十八話

瞼が重くてなかなか目を開くことができない。しかし、まばゆい光、癒しをもたらす清水が流れる音、そして全てを浄化するかのような緑の濃い香りを強く感じる事ができた。

意識を取り戻したルシフェルカは、仰向けに横たわったまま、大きく深呼吸し、自分に何が起こったのか鮮明に思い出した。そうして、全身が思うように動かず、視力も未だ戻っていない理由に得心がいったところで、遠くから誰かが争う音が耳に聞こえてきたのだった。

その音は、剣の鋼鉄を弾くような鋭い高音のものではなく、鈍くて重い、そう、生き物の体と体がぶつかり合う音だった。

『誰……ルーガ？　お願い、教えて……目が、目が見えないの』

心の中で助けを求めたルシフェルカは、必死に目を開こうとしたが、思うようにいかなかった。体は重石を乗せられたように自由が利かず、声を発することもままならない。

そんな状況を齒がゆく思い、苛立ちの呻き声を上げた時だった。ふと、水の音がする右側に温かな風が触れたかと思うと、聞き覚えのない、しかし、なめらかな青年の声が降ってきた。

『黒竜族長の想い人よ、私があなたの『眼』になろう』

そう申し出たのは、ルーガに道案内をした異界の青年であった。新緑色が瑞々しい人ならざる瞳に、わずかながら労わりの色が見えたが、それは大変珍しいことであり、妖精や精霊を知るものならば、彼らにそういう感情を生じさせる少女に驚くことであろう。

「だ……れ……」

目を閉じたまま、ルシフェルカは声にならない息を吐き出してやつの思いで姿の見えぬ、青年であろう人物に問うた。

『私は風の眷族。黒竜族長には、ある約束をしてもらったのだけけど、よもや彼の想い人があなたとは思わなかった』

ルシフェル力は、自分のことを知っているかのような口ぶりの青年を不思議に思い、やんわりと眉をしかめた。

その心情を見抜いたのか、風の青年はくすりと笑い、風の者の気性らしい奔放そうな軽やかな口調で続けた。

『約束を取り消すことはできないが、あなたが関わっているのだから、少々おまけが必要だ。これはそのおまけだと思ってもらって構わない。いいかい』

そう言うのと、風の青年はルシフェル力の額に手のひらを乗せた。

そして、その手をそのまま下へ動かし、瞼を撫でていったのだった。『見える……それに、体が少し楽になった』

体の感覚が変化したのと同時に、風の青年の気配が消えた。

謎だらけではあったが、ルシフェル力はさっそく体の向きを変え、這うようにして体を起こした。

先ほどまではまったく開くことができなかった瞼を押し上げると、遠くで誰かが争う姿が見えてきた。

「ルーガ」

いまだ血の味が残る咽喉のあたりが気持ち悪かったが、金色の髪の青年が大きな黒い獣——ルーエの体に咬みついたあの黒獅子と同じ種だ——と戦っている。しかも、苦戦どころか優勢であるのは明らかで、黒獅子は強者を前に今にも戦意を失いそうな目をしていた。『ルーガ……ルーガ』

風の青年のおかげなのだろう、ふらつきはあったが、二本足で立つことができ、両手で空気をかき分けながら竜のごとく猛々しいルーガを目指して歩き続けた。

ルシフェル力は、求める青年の姿を指先のかなたに見ながら、切なさにも胸が張り裂けそうになった。

優勢とはいえ、無傷のはずはない。人間の体の肉を容易に貫く太い牙と、獲物を捕らえる鋼のような鋭い爪を持った獣なのだ。もう、自分のために傷ついてほしくなかった。

だから、ルシフェル力は前進しながらも体中から絞り出すように

叫んだ。

何ものにも替え難いと思い、愛してしまった青年の名前を――。

第三十九話

ルーガは黒く大きな獅子にも怯むことなく立ち向かった。相手は体が大きい分、いささか俊敏さに欠けていたのだ。黒獅子の懷に飛び込んで各急所を正確に狙っては身を引く、という動きを繰り返すと、徐々に優劣が目に見えて表れ始めたのだった。

もちろん、ルーガを敵とみなしている獣も必死である。一番の武器となる太く鋭い牙と爪を最大限に活かし、一撃必殺を試みてはくる。が、しかし、黒竜族の大きな特徴の一つである皮膚の竜化——褐色の肌色がさらに濃くなり、竜のごとく硬化するのだ——によって、鋼鉄の鎧よりも強固な守りを手に入れた金の竜には文字通り歯が立たなかった。

若き黒竜族長の實力の一端を見せつけられ、慌てたのはトラロツク王国からの侵入者たる図書館員二人である。このままでは守護獣を倒され、自分たちまで捕縛されてしまう。そうなれば、黒竜族長の許可なくこの双竜山に足を踏み入れている事実が露呈し、王立図書館から除籍されてしまうだろう。焦燥感からそんなことを考え、保身に走ろうとする二人の研究者は未だ若く、ともすればルーガよりも年下のようなのだ。こういった危機に対処するには経験不足なのか、もつとも単純な行動、つまり、逃げの一手に出ようとお互いに頷き合った時であった。

「ルーガ……！」

はつきりとした少女の声が聖域に響くと共に、白い光の塊が徐々に近づいてくるのが誰の目にも明らかに分かった。すると、その光との距離が縮まるにつれ黒獅子の動きが鈍くなり、ついにはルーガに歯向かうのを止め、その場に伏せておとなしくなってしまった。

声に背を向けていたルーガもさすがに驚き、黒獅子が目を閉じて完全に静止したことを確認すると、すぐさま自分の名を呼ぶ少女——ルシフェルカの声に振り返った。

その光景は眩^めいばかりに神々しくも優しいものであった。

聖域の緑の絨毯の上をゆつくりと歩むルシフェルカは白い光に守られ、まるで精霊の女王の示現^{しげん}を思わせた。光に目が慣れてくると、視力が未だ回復していない少女は、美しい金色の髪 of 青年に手を引かれていることが分かった。その青年は、ルーガが風の精霊・流星と一体化した際に出会った異界の青年だ。

異界の青年は、驚愕の光景に絶句した三人の人物らに気付くと、新緑色の瞳に楽しげな光をきらめかせてやわらかく微笑んだ。

「異界の者を視認できるなんて……これは被検体が引き起こす幻覚か」

トラロック王国の王立図書館員のうちの一人が思わず呟いていた。あくまでもルシフェルカを被検体と称する輩に舌打ちしたくなったルーガであったが、今はそのような小さな怒りよりも、先ほどまで瀕死状態であった少女が目覚めてくれた喜びのほうが勝っていた。「ルシカ。よかった、意識が戻ったんだな。歩けるまでになるなんて、ちよつと予想外だったけどな」

ルシフェルカが伸ばした手をそつと掴み引き寄せたルーガは、そのまま目の見えない少女を抱きしめた。

「ルーガ、怪我はない？ ああ、また目が見えなくなったから、あなたの様子がわからないわ」

風の眷族である青年が手を離れたため、再び視力を失ったルシフェルカは、ルーガに抱きしめられたまま不安げに問うた。おそらく視力同様に回復しきれない体は間もなく力を失うであろうことは分かっていた。

だから、ルシフェルカはいつになく口早になっていた。

「ルーガ。ごめんなさい、ルーエをあんな目に遭わせて。この後、私が再び倒れたら、どうかそこにいる王立図書館員の方たちに引き渡して。そうしたら、もう守護獣を連れてこの双竜山に入ったりし

ないと思うの。ルーガや黒竜族の里の人たちがこれ以上危険な目に遭わないように――」

そんな謝罪するルシフェルカの言葉を遮るように、ルーガが少女を抱きしめる腕の力を強めた。まだ色を失っている柔らかな髪を撫でながら、叱りつけるように囁く。

「謝る必要なんてない。お前は自由なんだ、戻りたくもない場所になんて戻るな」

「ルーガ、でも……」

「俺の傍にいてくれ」

ルーガの言葉に、ルシフェルカのか細い体が震えた。あまりにも嬉しい言葉であつたが、その好意に素直に頷くことはできなかった。その迷いに気力が引き寄せられるように、少女の体から徐々に力が抜けていき、同時に白い光も消えてなくなつていった。

「ルシカ！」

糸が切れた操り人形のように崩れ落ちた少女の体を支えながら、ルーガは痛む胸の苦しさに眉間にしわを寄せた。

ルシフェルカの苦しみを取り除くことはできないのか。どうしたら、あの優しい笑顔でいてくれるのだろうか。その答えは、黒竜族長として考えたところでわかりはしないのだ。

生まれてから今まで、黒竜族長として判断することが当然で、それがルーガ個人の判断であると思つていた。だが、愛する少女に出会い、彼女と黒竜族を秤にかける事態になつて初めて気がついた。

黒竜族長である前に、ルーガはルーガであつたのだと――。

そう気づくと、自嘲気味に微笑んだルーガは、ルシフェルカの白い額に口づけた。

そして、背後で絶句したままの王立図書館員らを振り返つたのだつた。

第四十話

西の大国からの招かれざる客である王立図書館員と共に侵入した黒い獅子により引き起こされた大騒動から数日が過ぎていた。

毒物監査係長・ユルグの孫・ルーエが重傷を負うも一命を取り留めた事件は、瞬く間に黒竜族の里中に広がったが、リノンとギルウスの迅速な働きにより、里人たちが過剰な反応を示すことなく穏やかな日常が戻っていたのだった。

いつもと変わらぬ青い空、澄んだ空気、そして小鳥たちのさえずりが軽やかに聞こえる明るい朝、黒竜族長の館を訪問する者があった。

来訪者の名はセルジュ・ディローヌ。瀕死のルシフェルカに青い外套をかけた、謎の王立図書館員であった。

セルジュは長身痩躯の青年だが、不健康な印象はなかった。背筋が伸びた美しい姿勢は毅然としており、笑みひとつこぼさない、彫像のように整った顔立ちや灰色がかかった水色の瞳が彼の人となりを感じさせた。

玄関の扉を開け、初めにセルジュの姿を見たのはリノンで、たいそう驚いた彼女は束の間、開いた口がふさがらなかった。それもそのはずで、リノンはルシフェルカが王立図書館に軟禁されていた頃のことを知っており、当時ルシフェルカの異能力について研究を進めていた中心人物が誰あろう、このセルジュ・ディローヌに他ならなかったのだ。

我を取り戻したリノンは、いつもはおおらかさを象徴している大きな瞳を疑心で細め、見事なまでの鉄面皮ぶりを披露する青年を睨んだ。

「何か御用でしょうか。その装いから察するに、公用でいらしたようですが」

わざと慇懃^{いんぎん}な物言いでけん制する右竜・リノンに、しかし、セル

ジユは淡々と返した。

「黒竜族長に目通り願いたい。今回生じた、王立図書館員の不法侵入についてと、ルシフェルカ・アニスの処遇、そしてイオン・カエルラについて話がある」

「イオン？」

想定外の名前に思わず聞き返したりノンであつたが、そうだと逆に一言短く返してきたセルジユの声にあまりにも温度がないので、不覚にも怯みそうになってしまった。

「ルーガ……黒竜族長は、少々取り込み中ですので、お待ちください」

とりあえず咳払いでごまかし、渋々ではあるが、青年を客間に通したのであつた。

第四十一話

黒竜族長の館内で、ルシフェルカにあてがわれた部屋は二階にあり、日当たりのよい窓が大きく作られた、広すぎない居心地の良いものであった。

初夏の涼風が床に臥したルシフェルカの前髪を撫でていくと、少女はふと目を覚ました。

「ルシカさん」

そう静かに呼びかけてくれた声の主は探さずともすぐに顔を見ることができた。

金色の絹糸のような髪を揺らしてルシフェルカの顔を覗き込んだのは、イオンであった。

董色の瞳がわずかに潤んでおり、それがさらに少年の美しさを引き立てている――などと考えたのか、横たわったままの少女は弱弱しくはあったが笑みをこぼした。

「私、生きているのね……。ルーエは大丈夫？ それからルーガも」
相変わらず、自分のことよりもまず他人を気遣う優しい水色の瞳の少女に、イオンの表情も和やかなものになった。

「はい。ルーエは大量に失血したので、体力が戻るのは少し先になると思いますが、もう目を覚ましているばかりか、ありえないくらいに食欲旺盛ですよ。今朝は、野イチゴの砂糖漬けが欲しいと駄々をこねていました」

イオンは苦笑を交えてはいたが、表情に安堵の色を浮かべてそう語った。そして、羽毛入りの掛布をルシフェルカの肩まで引き上げてやりながら、ルーガも怪我ひとつなく普段通りにしていると、なぜか不服そうに唇を尖らせた。イオン自身も、ルシフェルカを直接助けたかったとは悔しくて口に出せないのだ。

「よかった……。そういえば、私、目が見えているわね。それに声を出しても平気みたい。以前、同じ状態になった時は、しばらく回

復しなかったのに」

「ブラン・オールのお陰です。あの聖域でルーガがブラン・オールを発見して、事件のあと、ルシカさんをもう一度その群生地に残らせたと言っていましたから、回復が早かったんだと思います。声も、たぶんもう、呪具を使わなくても大丈夫だと思います。現に、会話している俺はまったく何ともありませんよ。それから……」

意気揚々と説明をしていたイオンであつたが、やがて言いづらうにしましたので、ルシフェルカは微笑んで先を促した。

「その、ここに来てからの治療ですが、俺が調合したブラン・オールの内服薬を血管に直接投与させてもらいました」

イオンが明かした治療法に、ルシフェルカは目を大きくして問うた。

「血管に……って、その技術はトラロックのものでしょうか」

顔を青くして驚くルシフェルカに、イオンが慌てて弁解しようとした時だった。

部屋の扉を軽く叩く音がし、続いてリノンが顔を出したのだった。
「ルシカ。よかった、目が覚めたのね」

結い上げた褐色の髪を元氣よく揺らしながら、大腿で歩み寄ってきた長身のリノンは、寝具から両腕を差し出したルシフェルカに「え、実の姉のようにしつかりと少女を抱きしめた。

「無茶してくれたわね。あなたがここに運び込まれてきた時には、本当に生きた心地がしなかったわよ」

「リノン、いつもありがとう。イオンにも感謝しきれないわ。生きていることがこんなに嬉しいなんて、双竜山にきて本当によかった」
全身の倦怠感が強いためか、ルシフェルカはリノンに体を支えてもらわなければ半身さえ起こしてられないのだが、姉とも慕う頼もしい右竜たる女性は、力強く少女を抱きしめてくれた。それがたいそう心地よく、ルシフェルカはほっと息をついたのだった。

「あのね、リノン」

ルシフェルカは、さきほどイオンに聞くはずであつた問いをリノ

ンに投げかけた。

「王立図書館から誰か来ているのでしょうか」

ルシフェルカの問いに、案の定、リノンの体が強張った。少女を抱きしめる腕が戸惑いを隠せず一瞬大きく震えたのだ。

「さつき、イオンに聞いたの。血管に直接投薬したって……」

リノンは顔を上げ、すまなそうにしているイオンに大丈夫だ、と微笑んだ。こればかりは隠せるものでも、また、隠すものでもない。ルシフェルカの命を救うために最善かつ最高の方法であったのだから。

リノンは凜とした声音で言った。

「ルシカ。セルジュが来ているのよ。その投薬の方法は、セルジュが提供してくれたの」

ルシフェルカは、知った名前を聞いたとたん、重い体に鞭打つように、リノンから体を離れた。

「私……」

ルシカの瞳は動揺していた。悲しみとも切なさともつかない複雑な表情になり、次の言葉を探して唇が震えていた。

「ルシカさん」

ルシフェルカが今にも卒倒してしまうのではないかと心配したイオンが、小さな背中をそっと支えた。そんな心優しい少年にひきつった笑顔で礼を言い、少女はいったん深呼吸した。

そうして、心を決めたとばかりに唇を引き結んだあと、リノンとイオンの顔を交互に見た。

「逃げるのはおしまい。私は、私の気持ちをきちんと伝えるために、王立図書館に戻るわ。そのために——セルジュに会いたい」

ルシフェルカの決心を聞いた二人は、驚きよりも、とうとうこの日が来てしまったと落胆の面持ちになった。泣くことも怒ることもできず、少女の身がどうか自由になるようにと、黙して強く願うことしかできなかったのである。

第四十二話

ルシフェルカは綿入りの背当てを支えに寝台の上で上半身を起こし、西の大国からの来訪者たる青年と対面を果たした。思えば軟禁状態にされていた王立図書館を逃げ出して以来で、もうすぐ季節がひとめぐりするかという月日が流れていた。

リノンに導かれて部屋へ入った青年は、最後に見たときと変わらず長身で背筋が伸びており、邪魔だと言って常に短くしている栗色の髪や、感情の読めない灰色がかった水色の瞳も、何もかもが懐かしさを感じさせた。

「セルジュ、逃げたりしてごめんなさい」

開口一番、ルシフェルカはずっと伝えたかった言葉を口にした。

それ以外にどう話しかけたらよいか思い浮かばなかったというのが正しいだろうか。

セルジュは一瞬沈黙し、ルシフェルカに近づく前に歩を止めてしまった。

その様子に、付き合いが短いとは言い難い少女が何かを察し、笑みを浮かべて言った。

「驚いたでしょう。声を出しても大丈夫なの。ここにいてイオンのお陰なのよ」

ルシフェルカは、寝台の左側に控えていた少年を紹介した。

すると、気を取り直した青年は、無表情のままルシフェルカの傍らまで近付いたかと思うと、少し低めの、しかしながらさりとした聴き心地の声で、イオンを知っている、と言ったのだった。

「イオン・カエルラ。君については黒竜族長に話しをしてある」

今ここで詳細を語る気はないのか、はたまた背中に異様な気を感じたからか、少年の伯母であるリノンのやきもきした表情を一瞥し、セルジュはイオンに関してはその以上何も言わなかった。

ルシフェルカは何とは無しに察してはいたが、先に自身の身の振

りに方に決断を下すべく、右側に立ち尽くす青年の制服の袖を掴んだ。そして、優しい水色の瞳に強い意志を込め、セルジュの熱をも吸い込むような、温度を感じさせない瞳を見上げた。

「セルジュ、私は王立図書館に戻るわ」

迷いなく発せられたその言葉に、わずかに青年の瞳が揺れた。彫像のような印象はあるが、彫像そのものではないのだ。憎からず思う少女が望まぬ場所へ戻るというのに、無情ではいられなかったようであった。

だから、彼はルシフェルカの未だ白さが残る髪を撫でて静かに返した。

「確かに、王立図書館は未だ君を欲している。しかし、今、こうして呪具なしで声を発しているのだから、能力が消えたと言っても言っても戻らない手もある。無理はするな」

存外優しい言葉をかける鉄面皮の青年に、彼の数歩後ろに控えたリノンと、寝台の反対側に立つイオンは少なからず驚いた。

「変わっていないのね、セルジュ。あなたはこんなに優しいのに、私は裏切ってしまった。だから、一度戻って、今度はきちんと出て行くのよ。そうしないと、あなたに顔向けできないし、それに、ルーガにも会えなくなりそうなもの」

「黒竜族長に、か」

セルジュが呟くと、ルシフェルカは微笑んで頷いた。

「そうか……。ならば止める理由はないだろう。王立図書館へ君を連れて行くわ」

そう静かに告げるセルジュの口調は淡々としており、事務的にも感じられたのだが、少女を見下ろす瞳には、彼女を想う温もりとせつなさが同時に揺れていたのであった。

第四十三話

大陸を東西に分断する国境線のように峰を連ねる連山、双竜山。名前の由来どおり、広大な連山を守り治めるのは、二つの竜族——黒竜族と白竜族である。

現在、黒竜族を束ねているのは、若干二十五歳にして『竜聖』^{りゅうせい}の異名をとる青年・ルーガだ。

その黒竜族長・ルーガは、双竜山でも北部の領域に住む白竜族の長に会うため、左竜・ギルウスを伴い、緑ざわめく山道を歩き続けた。

白竜族の里は、黒竜族の里から山を歩き慣れた足で歩いて一日半から二日ほどのところにある。

もう間もなく目的地に到着する距離になったところで、すらりとした体型のルーガの隣を歩いている戦士のような体軀をした大きな男——左竜・ギルウスが、口を開いた。

いつもならば陽気な面持ちで、公務など面倒くさいと文句を言いながら歩くルーガであるが、黒竜族の里を出てからのこの二日間ほど、あまりにも静かなため、見かねたのだ。

「なあ、ルーガ。ルシフェルカに声をかけずに出てきたことを後悔しているのか」

落ち着いた低い声でゆつくりと話すギルウスの口調は、兄が弟を心配するそれに似ており、いつもと変わらぬものであった。

ルーガは、またギルウスにいらぬ心配をかけたと苦笑いすると、質問に対して首肯した。

「白竜族長に『白い悪魔』の一件について呼び出しをくらって、急用だから、といえばそれまでだけだな。でも、正直いうと、お前の言うとおり後悔しているよ」

「ならば、声をかければよかっただろう。お前らしくもない」

正論で反論の余地もないことを指摘するギルウスを、恨めしそう

に横目で睨んだルーガは前を向き直り、本当に彼らしくもなく俯き加減になったかと思うと、そのまま口をつぐんでしまった。そんな青年の口元は、自嘲の笑みともつかない複雑な形に歪められていたのだった。

さすがに、近しいギルウスにも言えるはずはなかったのだ。

『ルシフェルカが、あのセルジュとかいう男と王立図書館に戻ると決めたから気まずくなった、なんてさ』

稚拙すぎる理由だ。いつも、リノンから子どもではないのだから、と、小言を言われるが、今回ばかりはくだらない嫉妬だと、心の中で自らの頭を抱えてうずくまるしかなかった。

あの日――あの王立図書館から公用で赴いたセルジュが館の扉を叩いた日、彼は三つの用件を携えていた。

一つ目は、もちろん、若い王立図書館員たちの双竜山への不法侵入について。

二つ目は、以前から耳にはしていた、イオン少年の正式な王立図書館への就学依頼だ。

そして三つ目は、やはり、王立図書館から逃亡したルシフェルカの処遇についてであった。

一つ目の用件については、あの聖域で対峙した二人の若い王立図書館員をルーガの独断で逃がした形になったため、そのことで白竜族長に話しをしに行くところである。おそらく、白竜族の『雷光』ことカミナリおやじに大目玉を食らうことであろう。セルジュとはその後で正式に話をする事になっていた。

二つ目のイオンの就学依頼にしても、結局は本人の意思次第であると、ルーガは思っている。

だが、三つ目のルシフェルカに関しては、彼女の意思を尊重するなど、きれいな事だけを言える心境ではなかった。

王立図書館に戻れば、再び被検体として命を削るような辛い目に遭う可能性が高い。もちろん、そんな目に遭わせたくないなどない。しかし本音は、純粹に、ルーガ自身がルシフェルカに傍にいてもらい

ただけなのだ。

やっと見つけたのだ——心のよりどころを。

風のように気まぐれで奔放なルーガは『黒竜族』という大きな枷に意味を見出せなかったが、守る『意味』をルシフェルカが教えてくれたから、ルーガは変わった。

黒竜族長ではないルーガ自身が存在することを知り、それを受け入れる喜びも知った。

生まれてから風の精霊を友にし、家族と離れ、長となるべく育った彼に、今まで本人ですら認識していなかった愛情を知らしめてくれたルシフェルカ。

そうだ、そうなのだ。くだらない嫉妬をするくらい、ルシフェルカが好きなのだ。たった二日ほどしか経っていないというのに、彼女の顔を見たくてしかたない。

だが、館を出る前に一目会わなかったことは後悔しているものの、ルーガがすべきことは決まっており、それは愛する少女にもつながっていることだった。

とにかく前進あるのみ。

「ギルウス」

ルーガは小さく呟いた。やがて、俯き加減だった顔が上がり、まっすぐ前を見据えたかと思うと、真夏の蒼天を写し取った青い瞳に輝きが戻っていた。

そうして、迷いなど一掃してしまう張りのある声音で言った。

「大切なものは絶対に守る」

いつも通りの不敵な笑みをあつという間に取り戻したルーガに、ギルウスは穏やかな表情で肯いてくれたのだった。

第四十四話

双竜山を西側へ下山すると、初夏本来の温かさを肌で実感することができた。

大気はやや乾いているが、風が吹けば額の汗が冷やされ、爽快な気分だ。

同じ時間が流れているはずの世界でも、やや涼しい双竜山と比較し、リノンに背負われたルシフェル力はそつと息をついた。

体力の回復を待たずにトラロック王国に戻る事になったルシフェル力は、発熱で火照った額と頬を撫でてくれる風にうつとり目を閉じた。

西の大国トラロック王国。その中枢である王立図書館へ向かい、自分はもう被検体にはならないことを自らの口で宣言するため、ルシフェル力は居心地の良い黒竜族の里を出てきたのだった。

同行してくれたのは、ルシフェル力を背負うリノン、そして体調管理をしてくれるイオンの二人だ。セルジュは先に出発し、ルシフェル力の義兄二人に事の次第を報告しているはずであった。

ルシフェル力たち一行は、大幅な遅れもなく第一の目的地である山裾のアニス家別宅へ到着した。今はまだ緑の葉をつけた銀杏の木が玄関へと導く小道は、トラロック王国らしく整然と敷き詰められた石畳となっており、その両脇にはよく手入れされた花壇が初夏の花々を色とりどりに咲かせていた。

「ルシカ、そんなに長く離れていたわけではないけれど、懐かしいわね」

ルシフェル力を背負ったリノンが優しく笑った。

「お兄様たちは元気かしら……」

強い倦怠感でぐったりとしながら呟くルシフェル力を元気づけるように、イオンが前方を指差しながら声を弾ませた。

「ルシカさん、顔を上げてみてください。決心して下山したかいがあったみたいですよ」

イオンの言葉にリノンも頷いたので、ルシフェルカはのろのろと顔を上げた。

そうして見えたのは、穏やかな土色に近い石を敷き詰めた小道を走ってくる青年であつた。

青年はすらりと背が高く均整のとれた体型をしており、こざつぱりと短くした柔らかな栗色の髪が、ルシフェルカとまるで本当の兄妹のように似ていた。服装は伯爵家子息らしく真白い絹の中着の上に深みのある葡萄酒色をした襟付きの上着を着ており、革の長靴を履いた長い脚が駿馬を彷彿させる、申し分のない外見であつた。

その青年を見たルシフェルカは、大きく見開いた目にみるみるうちに大粒の涙を湛えたのだった。

「レスリイ兄様……！」

「ルシカ！」

リノンの背中から覗く小顔のルシフェルカを認識した青年も、大きな声で少女の名を呼んだ。

青年——ルシフェルカの義兄のうちの一人であるレスリイ・アニス俊足で、さほど待たずにルシフェルカ達のもとへ駆け寄っていた。そして、息も切らせていない爽やかさと輝く笑顔でリノンとイオンに礼を述べると、待ちきれないといったいで、背負われたルシフェルカに手を伸ばした。

「声……声が出せるようになったんだね。ああ、事情はセルジュから聞いたよ。僕は待ちきれなくて、ジェイス兄さんよりひと足先に早駆けしてきたんだ。どれ、ここから先は僕がルシカを連れて行く」

本当の肉親のように可愛がつてきた義妹との再会に興奮を隠しもしない、おおらかな性格のアニス家の次男は、柔らかな栗色の髪を弾ませてルシフェルカをリノンの背中から譲り受けた。

レスリイは口の端を目一杯に引き上げて破顔一笑すると、腕の中

のルシフェルカに頼ずりし、歩きだした。傍から見れば驚く大仰な可愛がりぶりも、リノンとイオンにとっては以前から見慣れたもので、ほほえましいものであった。

ルシフェルカは、七つ年の離れた兄の顔を見上げながら、嬉しくてその胸にしがみついた。

優しいレスリイ、懐かしい別宅、そして今となっては心地好ささえ感じる空気。

「おかえり、ルシフェルカ」

レスリイの囁き声に、ルシフェルカは目じりから涙がこぼれ落ちるのを感じながら頷いた。

辛い現実から逃げだしたが、やはり、帰ってきてよかったのだ――と。

第四十五話

懐かしい我が家に戻ってから、早くも十日が過ぎていた。

双竜山の山裾に建てられたアニス伯爵家別宅は、事実上ルシフェルカのための館であった。北の大国ウオールド王国にある『神々の森』で拾われた少女は、言葉を解さぬ赤子の自己防衛本能とも言つべき異能力を当時より発揮していた。少しずつ言葉を話すようになってからは、さらにその力が増幅され、本宅では暮らすことができなかったのである。

だが、周囲の生気をもらい受けるという力は本人にすら上手く制御できず、ルシフェルカの命を救うために人里離れた別宅で暮らすようにしたものの、それでも異能力はとどまることを知らず、前アニス家当主が、王立図書館に協力を求めるという苦渋の決断を下したのであった。

ルシフェルカは、出て行った時と変わらない自室の寝台で安心して体を休めている間中、今は亡き義父であるアニス伯爵や、二人の義兄らとの思い出、そして王立図書館でセルジュと過ごした日々に思いを馳せては、そのあとにルーガを思い出してため息をついていた。

と、昼前の投薬時間であると、イオンが部屋に訪れた。

「ルシカさん、やっぱり自宅が一番のようですね。顔色が良いです」
寝台脇に設けられた物置台に投薬のための道具と液体の入った瓶を手際よく並べ、白い右腕を自ら出したルシフェルカに美しい笑みを見せた。そして、縫い針よりも細く短い投薬用の針を薬液で消毒すると、すまなそうに少女の白い細腕に差し入れた。針にはブラン・オールから作られた薬を入れた瓶が繋がれており、瓶を斜めに傾けると、体に薬が入っていくようになっていた。

「針を刺したところが痛くないですか？ 腕を交互に替えてはいませんが……」

イオンらしい気づかいに、ルシフェルカは大丈夫、と微笑んだ。
「王立図書館にいた時、セルジュもよくそうやって訊いてくれたわでも、あの頃使っていた薬は炎症止めで副作用が強かったけれど、今は元気になる薬だから平気よ」

「そう言ってもらえると嬉しいですよ」

ルシフェルカがセルジュについて気さくに話すので、当初、王立図書館員だと警戒心をあらわにしていたイオンも、その印象が変化したようであった。

「ねえ、イオン」

投薬はやや時間がかかるため、その間イオンは付ききりである。いつもは眠ってしまうルシフェルカだが、今日は珍しく話を続けた。二人きりの今しか訊くことのできないことだ。

イオンの董色の宝石のような瞳が、優しくルシフェルカに向けられた。それを眩しそうに見つめると、少女は静かに切り出した。

「あのね、昨日、ジェイス兄様が報せてくれたのだけれど、王立図書館は、もう私を被検体として扱うことはないんですって」

大声は上げなかったものの、イオンの表情が寝耳に水とばかりに驚愕のそれになっていった。

「あの、それって」

「私が王立図書館に出向いて、きちんと話さなければいけなかったのだけれど、お兄様やセルジュ、それにここにはいないけれど、ルーガが、私の体の負担になるからって……」

また皆に迷惑をかけてしまった、とルシフェルカが付け加えると、驚いていたイオンは慌てて頭を横に振って力強く否定した。今のルシフェルカには、歩いて五日以上かかる王立図書館に行つて、気難しい学者相手に説得することなど無茶なのだ。それに、誰ひとりとして負担に感じながら行動した者はいないことは分かりきっている。「条件は、双竜山に王立図書館員が不法侵入した今回の件を穩便に収めること。それから、セルジュが、私の能力について無害であることを証言してくれたことも大きいわ。あとはね……」

そこで、ルシフェルカは突然涙ぐんで声を詰まらせた。

「どっ、どうしたんですか、あの、俺、何か悪いことでも——」

普段は大人顔負けの知識と弁舌を披露するイオンも、少女の涙には慌てざるを得なかった。しかも投薬中であるため、動くこともできず、助け船を求めて無意味であるが周囲を見回すその様は、まさに見ものであった。

「ちがうの。イオン、あなた、王立図書館に就学するのでしょうか」
今のルシフェルカに、笑う余裕はなく、怯えたようなまなざしでイオンを凝視している。

そうして、切れてしまいそうな声で問うた。

「あなたが就学することも条件に入っている——違う？」

イオンが絶句していたのは、瞬きを数回する程度で、その場の緊張感はずぐに笑いにとって代わられた。

「ルシカさん！ 何を言い出すのかと思いましたよ」

繊細な針を扱っている少年は、笑いで手元に震えが伝わらぬよう、必死になっている。

「笑い事じゃないわ。もし本当なら、それだけはやめて。私はきちんと自分で話しをしに行くから。あなたは黒竜族の里にとっただけではなくて、双竜山に必要な人だわ。私なんかのために未来を決めてはいけない」

本気でイオンを案じているルシフェルカに、少年はようやく笑いをおさめ、一息ついたあとなぜか嬉しそうな表情になった。と同時にブラン・オール薬液が入った瓶も空になったので、針を抜きながら話した。

「ルシカさん。たしかに、この間、セルジュ・ディローヌから就学の勧誘を受けましたし、それに応じることにしました。でも、俺、今初めてルシカさんが王立図書館から解放されたことを聞きました。あのセルジュって人、ひと言もあなたのことを引き合いに出したりしませんでしたよ」

少年の言葉を信用しきっていないのか、ルシフェルカはまだ不安

そうにしている。

「嘘なんてついていませんよ。俺、薬草学を極めたいんです。今、すぐく注目しているものがあって、それを探し出して研究します。それがうまくいけば、黒竜族の里の皆の役にも立つし」

「本当に本当？」

「本当に本当です。俺、自慢じゃないですけど、お世辞と嘘は言えないんですよ」

イオンが腕をそつと掴んで掛け布団の下に入れてやると、ルシフェルカはやつとひと心地ついて呟いた。

「決心して出てきたのに、結局何もできなかった。なんだか自分が情けないわ」

「何を言っているんですか。ルシカさんには目に見えないものをたくさんもらっているんですよ。元気に動けないルシカさんは、元気に動ける俺たちが欲しくても手に入れられなかったものをくれたんです。——感謝しています」

「イオン……あなたは命の恩人だわ。私のほうこそ、感謝しきれないのに」

ルシフェルカの春の泉色の瞳に吸い込まれそうになったイオンは、ふいに泣きそうになって慌てて目をそらした。

目の前の優しい少女を心から想っていたから、必死になって薬草について学んだ。生まれながらに恵まれた才能を持てあましていた少年に、学ぶ意義を与えてくれたのだ。

それが、今後の彼の人生にとってどれだけ有用な宝になったことか。

声が震えそうになっていたイオンは、言葉の代りに心をこめた笑顔を向けた。

すると、ルシフェルカは再び命の恩人である少年に礼を言った。

「本当にありがとう、イオン」

少年の真意はともかく、真心だけは十分に受け取ったルシフェルカの、偽りない言葉であった。

第四十六話

昼食後ルシフェル力は発熱がみられ、イオンが処方した薬湯を飲み眠りに落ちていた。

熱で顔を赤くした少女の呼吸が落ちていくと、傍で見守っていたリノンには安堵し、腰掛けから立ち上がった。

「ルーガ、遅いわね」

空気の入れ替えにと部屋の窓を開け放ち、昼食時の温かな風を取り込んで呟く。女性にしては長身で、きらめく生命力にあふれたリノンが窓辺に立つと、初夏の午後のぬるい風までもが活気を取り戻すようであった。

独り言に思えたその呟きには答える者があった。金髪の美少年・イオンだ。いつもルーガにからかわれてばかりの立場である彼は、ふんと鼻を鳴らした。

「きつと、白竜族長にしばらくられているんだよ。双竜山に不法侵入した輩を勝手に逃がしたんだから。それより、伯母さんは里に戻らなくていいの？　ギルウスさんもルーガに同行していて、館は主人不在でしょう」

イオンはルシフェルカの額に触れ、薬湯がきちんと効いていることに、よし、と小さくうなずいた。

見た目は普通の美少年、しかしながらその真剣な表情は一人前の医者である甥っ子に、リノンはあらためて感心していた。しかも、このアニス家別宅に来て、トラロック王国王立図書館に就学することが決まってからは、なおさら大人びてきたように思える。

「ルシカの傍にすることは、ルーガの指示でもあるわ。事態が完全に落ち着くまでは、ここにいますつもり。ジェイス様も了承済みよ」

「なるほど。王立図書館の連中が簡単にルシカさんを諦めるとは思えないしね」

難しい顔をしながら頷くイオンがあまりにも少年らしくないので、

頭が良すぎるのも考えものだ、と伯母として苦笑したりノンである。

と、そこへ、ルシフェルカの義兄であるレスリイが顔を出した。

いつもの明るい笑顔ではなく、警戒心をあらわにした硬い表情だ。

レスリイは眠っているルシフェルカを起こさぬよう声をひそめた。

「王立図書館の医学部長が来ている。ルシフェルカに直接会うといつて聞かない」

「そんな……突然、しかもジェイス様がないときに来るなんて！

ルーガたちと話し合って、ルシカを解放すると決めたはずでは」

眉間にしわを寄せて怒りの声を上げたりノンは、慌ててルシフェルカが眠っていることを確かめた。幸い、少女が目を覚ました様子はない。

親友である少女のこととなると、つい熱くなってしまうリノンに、彼女の甥が静かに声をかけた。

「落ち着いて、伯母さん。とにかく、今のルシカさんに面会は無理なのだから、会わせるわけにはいかないよ。レスリイ様、ジェイス様はいつ戻られるのですか」

十二歳という年齢を超えた董色の理知的な瞳を受けたレスリイは、自身もリノンと同じく焦燥感に駆られていたことを内心で認め、ふと上着の襟を正し背筋を伸ばした。

「兄さんは双竜山の入山口に人を迎えに行っただ。予定では今日の昼過ぎ——つまり、そろそろ戻ってもいいはずだ」

「そうですか。では、医学部長には待っていただくようお願いしましょう。あの、レスリイ様、ひとつお願いがあるんですが……」

イオンはルシフェルカの傍を離れ、すらりと背の高い青年の前に立つと、その柔和な表情の顔を見上げた。しかし、いつもの自信家の彼らしくなく、少々発言を躊躇している。

「どうしたんだい、イオン。言ってごらん」

そのレスリイの声音が、どんな時も優しいルシフェルカを彷彿させたことに勇気をもたらったのか、イオンは再び口を開いた。

「実は、医学学部長に俺を会わせていただきたいんです」

この発言に驚くかと思われたリノンは意外にも静かな面持ちをしており、それを見たレスリイは即座に少年が次に言わんとすることを予測したのだが、念のため問うてみた。

「イオン……。何故なのか訊いてもいいかい？」

もちろん、と、イオンは金色の髪を揺らして肯いた。

「ご存じだと思いますが、俺は王立図書館の医学部に就学することが決まっています。でも、昼食前にルシカさんと話していて自分の気持ちに気づいたんです。俺が探究したいのは薬草学だということに」

偽りない素直な気持ちを打ち明けたのであろうイオンは瞳を輝かせていた。そこには大人に強要されているといった悲愴な色は微塵もなく、完全に己の意思を以って決断しているということが伝わってくる。

「そうか。では、イオンは薬草学部に入るため、医学部長に断りに行きたいというわけだね」

「はい、お願いします。その……やはり許してもらえないでしょうか？」

最後は幼さを見せたイオンに、子どもが大好きなレスリイは嬉しそうに口角を引き上げた。

「まさか。学ぶのはきみだ。子どもだからといって医学部長に面会してはいけないということはないよ。おそらく兄さんでも同じことを言うと思う。では早速――」

レスリイがそう言いかけた時であった。寝台から、か細い声が途切れ途切れに聞こえてきた。

「わ……たし、も、行く」

「ルシカ。起こしてしまつてごめんなさい。だめよ、寝ていないと起き上がろうとしたルシフェルカの傍にリノンが慌てて駆け寄り、寝かしつけようとしたが、熱で顔を赤くした少女の懇願するような視線にいつものごとく負けてしまった。

「ルシカ、無理をしてはいけないよ。もうお前は王立図書館とは関

係なくなつたのだからね。何も心配することはない、あとは兄さんたちに任せておくれ」

リノンに半身を起してもらつた妹をレスリイがさとうとしたのだが、存外頑固な少女は譲らなかつた。

「私も自分のことは自分で決着をつけるべきでしょう。お願い、レスリイ兄様」

「ルシカ……」

優しい水色の瞳が潤んでいるのを見て、誰がその願いを拒むことができるであらうか。

答えはすでに決まっていた――。

「忘れていたよ、アニス家の誰一人としてお前に敵わないんだつた」レスリイの大きなため息がこぼれたが、温かな陽光に満たされた部屋には久方ぶりに笑い声が戻ってきたのであつた。

第四十七話

国境線の意味合いを持つ連山・双竜山は、各山々に出入り口を設けている。これには、お互いの国々を安心して往来できることと、他国の情報をいち早く知ることができる利点があった。しかし、中にはその出入り口を利用せず、秘密裏もしくは緊急事態のため山を越えようとする者たちもいる。そんな輩を取り締まっているのが、白竜族と黒竜族なのである。そして、彼らが誇りをかけて守る山々は今日も何事もなく、多くの旅人たちが山道を行き交っていた。

その人々に混ざり、双竜山を西側、つまりはトラロック王国側へと下山するひととき目立つ二人組があった。

若き黒竜族長ルーガと、左竜ギルウスである。

二人とも長身で、特にルーガなどはその輝く金色の髪と端正な容貌が人目をひいたが、やはり何といても、両者からあふれる力強い気力と自信が並々ならぬ存在感を示し、すれ違う人々の視線をくぎ付けにした。

「ああ、白竜族長の説教は長かったな。あんなに誰かにしぼられたのは何年振りだろうな」

もうすぐ山裾に到着するという時に、様様なことを思い出したルーガは、辟易した様子でため息をついた。

すっかりいつもの調子を取り戻している黒竜族長に、ギルウスが小さく笑った。

「お前を本気で反省させることができるのは、白竜族長様しかおられないだろうな。たまにはいいだろう、落ち込んでみるのも」

「そのたまにが、あんな雷を食らうことだなんてごめんだね。同じ失敗はしないと肝に銘じたよ」

「良い心がけだ。やはり今回の件はお前にとって悪いことばかりではなかったようだな」

「……まあね。これでルシカにも堂々と会えるんだ。さあ、急ごう

か、アニス伯爵家の別宅へ」

気を取り直したルーガが歩く速度を上げた。それに余裕の表情で続くギルウス。

そんな二人が双竜山を下り、トラロック王国へ一歩足を踏み入れると、そこで一人の青年が待っていた。

青年は仕立ての良い服装から高貴な家柄の者であることがわかる。さらに、物静かな佇まいが良く似合い、やや感情表現に乏しいが堅実そうな光を宿した切れ長の目が見るものの心を捉え、只者ではない印象を与えた。

青年は、ルーガたちの姿を見ると、迷いなく悠然とした足取りで近寄り声をかけてきた。

「不仕付けで申し訳ない。あなたは黒竜族長、ルーガ・レクスで間違いないだろうか」

見た目の印象を裏切らず、抑揚が少ない口調が一瞬、ルーガの中では王立図書館員のセルジュ・デイローヌの面影と重なる。青年からは危険な気配を感じることはなく、それは傍らのギルウスが態勢を変えていないことで確信が持てた。

何も言わないルーガの心を読み取ったかのように青年が淡々と続けた。

「私はジェイス。——ジェイス・ヴァロアルス・アニス。ルシフェルカの義兄だ。あなたを迎えに来た」

第四十八話

双竜山からトラロック王国の地へ足を一步踏み入れた途端、初夏のなまぬるい空気を肌で感じたルーガであったが、目の前の青年の、冷気を誘う冴えた青色の瞳に見つめられると、体感温度が下がったような気がした。

それは恐怖といった感情ではなく、心の内をさらりと撫でられたような妙な感触がし、自然と背筋が伸びてしまふ、まるで故郷のユルグ老を思い出させるものだった。

「どうかされたか」

^{いぶか}訝る言葉とは思えないほど単調な口調で問われ我に返ったルーガは、首を横に振った。

「いや、失礼。確かに俺はルーガ・レクス、黒竜族長だ。——しかし、迎えにきたとは？」

言外にその素性を疑った黒竜族長のもっともな質問に、ジェイスと名乗った青年は気分を害した様子もなく答えた。

「王立図書館薬草学部長補佐、セルジュ・デイローヌから話しは全て聞き及んでいる。ルシフェル力が随分と世話になり、感謝している。別宅ではあるが、ぜひ当家へお寄りいただきたいのだが、いかがか」

嘘のつきようもない内容に、ルーガは青年が確かにアニス伯爵家現当主であると確信し、明るい声音で率直に胸の内を明かした。

「まさかアニス伯爵御自ら迎えに来てもらえるとは思わなかった。それに、どうやって俺たちが到着する日が分かったのか教えてもらいたいな」

相手が貴族であろうと、その素性を知ったルーガの口調はくだけたものになる。隣でギルウスが困ったような表情をしたが、若き黒竜族長のそれが相手に対する好意の高さを推し量る材料であることを知っていたため、あえて何も言わないようだった。

ジェイスもルーガの口調のことは気にならなかったようだが、彼の太陽のような明るさには少々驚いたらしく、冷たい色をした瞳に温度が生まれた。

「ルーガ、あなたはセルジュとリノンから聞いた通りの人のようだ。それから質問の答えだが――まず、義妹の恩人だ。私が迎えに行くことは当然であるといえるだろう。そして、今日という日が何故分かったかという」と

ジェイスは瞳だけでなく、今度はうつすらと表情に温かさを含せた。

「ヴァロアルスという聖名^{せいめい}で気づくかと思うが、私の先祖には有翼^{ゆうよく}人がいる。したがって、その血筋から受け継いだ異能力であなた方が来ることを感知できた」

つまり精霊が報せてくれたのだ、とジェイスは最後に言い加えた。事情を知ったルーガはすっかり感心顔だ。ジェイスに心の距離も含めて一歩近づく。

「トラロック王国の伯爵にウォルド王国の血筋とは驚きだ。ルシカが存在を受け入れたことも頷ける。それで、別宅へ行くという話だが、ルシカには会えるだろうか」

ルシフェルカに対する好意を隠そうともしないルーガであったが、ジェイスは快く首肯した。

「旅の疲れが取れないので寝かせているが、面会はできるだろう。それよりも、少々気がかりがあつて急いでいる。できればあちらで待たせている馬車の中で続きを話したい」

「何かあるのか」

無表情に近いジェイスは淡々としていたが、急ぎと聞いたルーガが真剣な面持ちになった。

馬車に乗るべく後ろを振り向きかけていたジェイスは歩を止めると、首を縦に振った。

「王立図書館からルシフェルカに会いに来る人物がいる」

「それは……」

「——ルシフェルカを被検体にしていた、医術学部長だ」

その後、アニス家別宅までの道のりには、馬に幾度も鞭打つ音と、激しく回り続ける車輪の音が鳴り響いたのは言うまでもなかった。

第四十九話

ルーガたちを乗せたアニス伯爵家の四頭立て馬車が慌ただしく目的地である別宅へ到着すると、館ではちょっとした騒ぎになっていたところであつた。

「おかえりなさいませ、ジェイス様」

使用人の女が一人、主の帰りを待ちわびていたように足早にやってきた。長年アニス家に仕え、主人の宿泊先への同行を許されているジェイスリンだ。

「どうした」

必要以上に取り乱したことのない沈着冷静な彼女が、わずかであるが焦燥感を漂わせており、ジェイスが眉根を寄せたのも道理であつた。

ジェイスのあとに続いて館に入ったルーガとギルウスも無言のうちに問うている。

ジェイスリンは客人二人に対し略式ながらも挨拶をすると、ジェイスに耳打ちした。

と、急速にアニス伯爵の瞳の温度が下がり始めた。いや、そう変化したように感じられるほど、彼の身にまとう空気が冷ややかなものになったのだ。

「——そうか。それで、医術学部長は今どこにおられる」

「応接間でお待ちになられています。それと、ジェイス様」

軽く目を伏せたジェイスリンの声音はいたって静かで淡々としていた。いつもなら主に尋ねられたこと以外に不必要な発言はしない賢明な女性だが、今回は言い添えることがあつたようだ。若き主が、ルシフェル力を誰よりも大事に育ててきたことを知っているからだ。「差し出がましいことを申しておりますのは承知でございます。ですが、ルシフェル力様がお倒れになられたのは、お悲しみになられたからではないと拝察いたします」

「ルシカが倒れたのか」

堅実そうなアニス家使用人の言葉に即座に反応したのは、主であるジェイスではなかった。

「ルーガ、落ち着け」

アニス伯爵とその使用人の会話に割って入った黒竜族長ルーガを、その片腕たるギルウスがすかさず宥める^{なだ}。しかし、ルシフェルカの名を一度聞いたルーガの勢いは止めることができなかった。

「ジェイス、早くルシカの顔が見たい。会わせてもらえないか」
ルシフェルカが倒れた――。

その言葉を聞いた瞬間、目まぐるしくルーガの頭の中でかなり確実な憶測がめぐっていた。それは、かつてルシフェルカを被検体として己が研究を進めようとしていた医術学部長と対面した少女が、何らかの衝撃を心に受けて体調を崩したというものであった。暴力をふるわれたのなら、男の使用人が館内に姿を見せていてもいいはずだ。

憶測の正否や、その倒れるほどの衝撃が何であったかなど、今のルーガにとっては第一に考えるべきことではない。まずはルシフェルカの姿をこの目で確認することなのだ。

そんなルーガの気迫が伝わったのか、アニス伯爵は一瞬、ルーガの夏の青空を思わせる、澄んだ青い瞳を凝視したかと思うと、ふと表情を和らげた。そうして、何かに納得したように軽くうなずき、熱心な黒竜族長の願いを聞き入れたのだった。

「あなたは不思議な人だ、ルーガ。――ケイスリン、後は頼む。私は医術学部長にお会いする」

「感謝する、ジェイス・アニス」

表情を子どものように輝かせる長身の青年を見て思わず顔をほころばせたケイスリンに導かれ、ジェイスはルシフェルカに会うべく、^{はや}逸る心を抑えて一步を踏み出したのであった。

第五十話

アニス伯爵の別宅は、山裾にひっそりと建てられた煉瓦造りの館で、アニス兄弟がこの上なく大事に育てた義妹ルシフェルカが過ごしやすいよう細やかな心遣いが施されていた。

板張りの廊下にはすべて絨毯が敷かれ、要所に休憩用の腰かけが設けられている。さらに、トラロック王国最新の技術を用いた湯の道を張り巡らし、室内が快適な温度に保たれるようになっていた。調度品もルシフェルカにふさわしく、廊下の壁のランプの笠はかわいらしい花模様で、その花を想起させる香油を焚いているのか、甘く清々しい香りが漂っていた。

ギルウスを客間に残し、ルシフェルカに面会するべく一人で案内役の後に続いたルーガは、ルシフェルカが育った家にいる感慨にふけていた。

ふと、つつましかに前を歩いていた使用人の女性であるケイスリンが口を開いた。

「この別宅は、主であるジェイス様と弟君のレスリイ様が、ルシフェルカ様のために建てられた館でございます。男性のお客様は、ルーガ様以外にはセルジュ様と医学部長様しかお招きしたことがございませんが、中でも、あなた様は主自らが出迎えた特別なお方でございます」

そう言いながらケイスリンが相好を崩した。一見、主と同様に気難しく見えた彼女だが、ルシフェルカを一途に思う気持ちを隠さぬルーガを好青年と感じたのだろう、歓迎の意が和やかな物腰から伝わってきた。

その気持ちを嬉しく思ったルーガは、花の香りを吸い込みながら呟いた。

「ルシカは皆に愛されているのだな」

「はい。私が語るのはおこがましい限りですが、ルシフェルカ様は

我が娘のような存在です。お辛い目に遭われても卑屈になることなく、優しい心根のままお育ちになりました。憎く思う方などいようはずもありません」

どうやら、ケイスリンは義兄二人に引けを取らぬくらいにルシフェルカを大切にしているようだ。

ルーガがそつと苦笑をもらしたところで、ケイスリンがある部屋の扉の前で歩を止めた。

「ルーガ様、こちらがルシフェルカ様のお部屋になります。お取次ぎいたしますので、少々お待ち下さいませ」

いいいよだ。そう思うと、ルーガの心は落ち着きを失い、すぐにも目の前の扉を自分で押し開けて部屋に入りたい気持であつたが、ここは待つしかなかった。

長いような短いような時間を待つと、戻ってきたケイスリンは、ルーガの逸る心中を知つてか、にこやかに部屋に招く仕草をした。

「ルシフェルカ様がお会いになられるそうです。どうぞお入りくださいませ」

そう言われるや否や、ルーガは駆け込む勢いで部屋に足を踏み入れたのだつた。

第五十一話

部屋に入ったとたん、ルーガはやっと呼吸をすることができた感覚に襲われた。

ルシフェルカは、双竜山にいた時とは違い、裾がふわりと広がった上品な薄紅色の服に身を包んでいた。トラロック王国の貴族令嬢としては簡素なのだが、肌の色が白く、柔和な雰囲気少女にはとても良く似合っていた。

薄茶色の柔らかな髪、春の泉を思わせる水色の瞳は優しい人柄を滲ませており、双竜山で別れた時となんら変わらなかった。もちろん、長く離れていたわけではなかったが、顔が見えないだけで息苦しさを感じるほど待ち焦がれた再会に、懐かしさが一気にこみ上げた。

「ルシカ——！」

ルーガの姿を見て布張りの長椅子から勢いよく立ちあがったルシフェルカの体が前に傾^{かし}いだので、ルーガは跳ねるように駆け寄り、彼女をしっかりと抱きしめた。

ルシフェルカの体温を感じた途端、ルーガの頭から言おうと思っていた言葉が霧散していた。

体調を気遣う言葉や、義兄らが人格者であること、そして事件は穏便に片付いたことなど、たくさんあったはずなのに。

一言しか口を衝いて出てこなかった。しかも、予定外の——。

「愛している、ルシカ」

少女の頭を抱え込み、その耳もとで囁いたルーガは、存外冷静で心穏やかであった。

ルーガの表情には照れや羞恥心など微塵も見られず、呼吸をするのと同じ感覚で言葉が空気に溶け込んでいった。

しかし、告白されたルシフェルカはよほど驚いたのだろう、肩を震わせ、やっこの思いで身じろぎをすると、長身のルーガを見上げ

た。そして、その端正な顔を近くにして双眸を潤ませた。

「ルーガ、私……」

緑の葉から朝露が一粒こぼれ落ちたかのような透明な涙が白い頬を流れると、ルーガの唇がそれを優しくとらえた。その唇は自然に離れたあと、次にルシフェルカのそれに真綿に触れるかのごとく寄せられていた。

それは本当に一瞬のことであつたが、ルーガの想いはしっかりと伝わっていた。

感極まつたルシフェルカが自らルーガにしっかりと抱きつく。

「殴つてもいいぞ、ルシカ。いきなりすまなかつた」

今になって、ルーガが笑いを含んだ声音で言つたが、ルシフェルカは頭を横に振つた。

「嬉しい……。でも、兄さまには内緒ね」

やつと笑つた少女に、ルーガも目を細めて笑顔になつた。

その後、少々顔色の悪いルシフェルカを慮つたルーガが座るよう促したところで、使用人のケイスリンが扉を叩く音がし、温かい紅茶を運んできた。

と同時にリノンやイオン、そして客間で控えていたギルウスも顔を見せたので、皆で円卓を囲むことになつた。

部屋に入るや否や、イオン少年はルーガを睨み、ルシフェルカを泣かせるなど唇を尖らせた。そんな彼を笑顔でなくさめたりノン、それを穏やかに見守るギルウス。

それは黒竜族の里でのいつもの光景であり、ルーガにとってはもちろんのこと、ルシフェルカが望んでやまなかつた心を癒す何物にも代えがたい宝であつた。

第五十二話

ルーガに再会したルシフェルカは、黒竜族の里の面々と休憩を取ったあと、再度自ら客間に赴き、医術学部長に気持ちを伝えた。すなわち、王立図書館には戻らぬという決意と、治療法はどうあれ、今まで命をつないでくれたことに対する感謝の気持ちである。

多忙を極める医術学部長は早々に王立図書館へ戻らねばならず、ルシフェルカと交わした言葉は多くはなかった。しかし、声を取り戻し、笑顔を輝かせた少女を感慨深げに見ながら何度もうなずく医術学部長のその表情はまるで祖父が孫を慈しむようであり、決して被検体としてだけ見ていたわけではないことが分かった。

そして、今後もルシフェルカの治療に協力を惜しまぬ約束をした医術学部長は、心なしか肩の荷が下りたかのような晴れやかな笑顔で馬車へ乗りこむと、アニス邸を後にしたのであった。

その後、散歩をすると義兄二人に言い置いたルシフェルカは、一人、手入れの行き届いた森のような庭を奥へと進んでいった。

濃い緑の香りが清々しい広大な庭では小鳥がさえずり、木々の間から兎や狐が時折顔をのぞかせているのを見ると、おのずとルシフェルカの顔には笑みが浮かんだ。

この別宅の庭は、あえて木々をたくさん生やしており、ルシフェルカの命の糧となるよう配慮されていた。しかし、今では体力が飛躍的に回復し、声で他者の命を縛ることもない。そのことが自信につながり、生きている実感が、そして地に足をついている感覚がますます少女の回復を助けていた。

ルシフェルカはふと金鳳花の黄色い花を見つけ、その傍で屈んだ。これは花弁が金色で葉から茎が白色のブラン・オールとは違い、普通の金鳳花だ。神々しさはないが、可憐な植物である。

「あなたの仲間のブラン・オールにはとてもお世話になったのよ」ふと、そう笑顔で話しかけたルシフェルカに、背後から青年の声

がした。

「やっと見つけた。お前の家の庭は広いな」

立ち上がり後ろを振り向いたルシフェル力は、金色の髪をした声の主を見て顔を輝かせた。

「ルーガ！ お義兄様たちとゆっくりお話はできたかしら」

ルシフェル力が小走りでルーガに近寄ると、二人は自然に抱きしめ合っていた。そうして、手をつなぐと、散歩の続きを楽しむことにした。

「ここの風は穏やかで気分が落ち着くな。俺の流星もとても気持ちよさそうにしている」

昼間は太陽の光にまぎれて見えないが、頭上近くにいる風の精霊を見上げた。

「お義兄様たちが、館の装飾よりも環境を重視なさって整えた庭なのよ。この家と庭がなかったら、私はもっと早くに天に召されていたかもしれない」

「そうか。お前の義兄さんたちはすごいな。特にジェイスはかなりの切れ者だ。伯爵にとどめておくにはもったいないと思ったよ」

自慢の義兄を褒められて幼子のように歯を見せて笑ったルシフェル力の頬にそつと手を当てたルーガは、少女の水色の瞳を見つめて続けた。

「今まではお前の義兄さんたちがお前を守ってきたが、今後は俺が守ります——って言うておいた」

悪戯つ子よろしくにんまりと笑ったルーガの発言に驚いて目を丸くしたのはもちろん、ルシフェル力の色白の顔があつという間に真っ赤になってしまった。

「あの、それは、ええと……」

すっかり思考回路が混乱している少女の慌てぶりに吹き出したルーガは、ますます愛しさが増したとばかりに目を細め、今度ははっきりそれと分かるよう口づけた。

「ル、ルーガはズルい」

恥ずかしさを紛らわせようと俯いたルシフェル力をぎゅっと抱きしめたルーガは、幸せそうに目を伏せて静かに言った。

「ルシカ——俺の妻になってほしい。黒竜族の里に一緒に来てほしいんだ」

胸の中のルシフェル力は泣いていた。ルーガがそんな彼女の柔らかな髪を撫でると、少女は嗚咽を漏らしながらも声を絞り出した。

「わ、私、体が弱くて何の役にも立てない」

「そんなことないさ」

「お荷物になるかもしれない」

「軽いもんだ」

「でも、ルーガが大好き」

「それで十分……！」

ルーガの腕に再び力が込められると、ルシフェル力はもう迷うことなく青年の背中に腕を回してしっかりと抱きついた。

そのとたん、温かな一陣の風が庭の森を通り抜けていった。

髪を乱された二人は、顔を見合わせたあと同時に笑い出していた。

「風の精霊だった。きっと、通りすがりに祝ってくれたのかもしれないな」

楽しげに言うルーガ、そしてそれに笑顔で肯くルシフェル力。

二人は寄り添いながら、風が向かっていった方を見つめていたのだった。

了

第五十二話（後書き）

お、終わりました。なんとか。

恋愛ものは大の苦手ですが、とにかく終わりまで……と頑張りました。

拙い作品ですが、とりあえず終わらせられて嬉しいです。

頑張って読んで下さった方々、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0228i/>

ブラン・オール—白き乙女と金の竜—

2011年1月11日00時59分発行